様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００５～２００８
課題番号：１７５２０２８５
研究課題名（和文）日常言語における伝達話法のメカニズムの認知語用論的研究
-認知と談話の統合理論-
研究課題名（英文）Cognitive Pragmatic Study of Reporting Discourse in Natural Language: Integration of Cognition and Discourse

研究代表者
崎田　智子(SAKITA TOMOKO I.)
同志社大学・言語文化教育研究センター・准教授
研究者番号：１０３２９９５６

研究成果の概要：

本研究では、日常言語の対話的そして伝達的性質を、認知言語学、談話情報理論、社会的相互行為理論の多角的視座から分析することにより、伝達に関わる文法構造、談話情報構造、認知システム､構築プロセスまでを解明しようと試みた｡従来のアプローチを根源的に問い直し、実際の生きた文脈における言語運用現象を取り上げ、言語科学の新たな理論的枠組みである認知語用論により認知と談話の視点を統合して伝達を取り巻く言語現象を体系的に分析した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,700,000	0	1,700,000
２００６年度	0	0	0
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：言語学、英語学、認知科学、談話情報、語用論

１．研究開始当初の背景

以前の伝達話法研究は話法や時制を始めとする文の形式と構造の側面の研究(Comrie 1986, Declerck 1990)が中心であり、実際の伝達の場における言語運用面での体系的な伝達メカニズムの研究は本格的にはなされていない状況にあった。が、談話における機能や様式の分析が加わり(Yule 1992, Holt 1999)、時制に関しても談話分析により新しい見解が示され(Fleischman 1990, Sakita 2002)、本研究申請時期には類型論的に広がりを見せてきたところであった(Gueldemann & Roncador 2002)。ただし、伝達動詞や接続詞に関しては、社会言語学的研究(Ferrara & Bell 1995)や文法化の指摘(Romaine & Lange 1991)がなされた程度であった。一方、談話分析とは枠組みを異にしてきた認知言語学においても、談話との理論統合の必要性が提唱され始めていたところであった(Couper-Kuhlen 2000, Langacker 2001)。そのような中で、本研究は、談話における情報の研究の核となるChafe (1994)、それを進展させたDu Bois (2001, 2003)、認知言語学の

Langacker (2001)らの理論を統合し、新たな認知語用論的枠組みを開拓しようとする試みであった。

２．研究の目的

伝達はコミュニケーションや認知機構の本質を反映する言語現象であり、多岐にわたる伝達話法の様式は話者と言語環境との多様な関係性の中で、複雑な認知プロセスにおける情報解釈や構成を反映している。従って伝達話法はその重要性が社会学や心理学他多くの分野で認識されてきた。しかし従来の言語学においては、伝達研究の対象は話法や時制等の文法構造が中心であり、その本質や全容は明らかにされなかった。

本研究は、従来の文文法では捉えられなかった伝達話法の談話におけるメカニズムを認知言語学と談話情報を統合した理論により分析し、伝達話法が知覚、記憶、回想、言語化を含む複雑なプロセスを経て表出する仕組みを解明し、認知語用論の枠組みで認知と談話の視点を統合した新しい伝達理論の構築を目指すものであった。伝達を認知、談話、文法の側面から多角的に捉えながらもそれらを統合して、伝達話法の文法構造、談話情報構造、認知システム、構築プロセスまでを体系的に解明することを当初の目的とした。

３．研究の方法

談話における伝達のメカニズムを認知語用論の見地から詳細に分析するため、あらゆるレベルの人間関係と場面設定を含んだ３種類の自然言語データ（英語及び日本語）を以下のように収集し談話分析及び定量分析を行った。

（１）フィールドワークにより日常言語データを録音収集し伝達や語りを含んだ部分を中心にトランスクライブし文脈情報とともに整理した。
（２）限定された環境（抑制状況とインタビュー形式）で伝達発話を抽出しトランスクライブした。
（３）定量分析用に自然言語コーパスよりデータを採用した。

同時に、認知言語学及び談話情報論の視点を統合し認知語用論というアプローチを定義するため、文献収集と review を経て、一方で談話の構成単位、情報の流れと linkage、認知と意識による情報制約と文法構造、また一方で認知スペースや注意のフレームの概念をベースにした談話展開の捉え方を整理し、日常会話における伝達場面でこれらが実際の言語運用に用いられるメカニズムを分析する基盤とした。

続いて、以下の４つのアプローチを中心にして、認知、談話、文法の側面から多角的にデータ分析を行った。

（１）主体の認知能力の観点から談話展開をとらえようとする Langacker (2001)の注意のフレームや認知領域(CDS)を用いた認知モデル。
（２）Chafe (1994)のイントネーションユニットに基づく情報の制約の概念を用いた Du Bois (2003)の Preferred Argument Structure 理論。
（３）記憶と回想における情報の流れと活性化に関する Chafe (1994)の意識の流れ理論。
（４）共鳴の概念を用いて対話中の言語要素間のマッピング関係をモデル化する Du Bois (2001)の対話統語論。

４．研究成果

本研究では、日常言語の対話的そして伝達的性質(Voloshinov [1929] 1986, Bakhtin [1952-53] 1986)を言語科学の新たな理論的枠組みである認知語用論の視点から追究しながら、認知言語学及び談話情報論の視点を統合した伝達理論の構築を試みた。特に談話の展開に沿った情報の流れと自然な相互行為における伝達の連鎖を関連づけて分析する中で、発話が知覚、記憶、回想、言語化を含む伝達の複雑なプロセスを経て表出する仕組みを探求し、発話と伝達に関わる文法構造、談話情報構造、認知システム、構築プロセスを分析した。得られた成果のうち特に重要なものは以下に挙げる通りである。

まず第一に、日常会話における伝達場面で実際の言語運用において談話が展開するメカニズムを捉えた。（１）イントネーションユニットと CDS モデルをベースにして、自然な日常会話データにおける談話展開プロセスと言語事象の背景となる認知プロセスの説明を行った。実際の会話の中で連続した発話のそれぞれが先行発話に次々に積み重ねられていくことで CDS を更新していく様子が明らかになった。（２）慣習化された注意のフレーム様式と構文スキーマに対して、口語談話における自然なイントネーションユニット分割の背後で情報の制約（特に情報の新旧に関わる制約）が果たす役割を検証し、さらに習得とストラテジーとの関係を探求し

た。

第二に、会話や相互行為の認知的背景を探るため、Du Bois (2000, 2001)の対話統語論に基づき、自然な会話における言語形式間の響鳴関係を詳細に分析した。会話の参与者がパターンやスキーマの共通認知に基づいて響鳴を追求・保持することにより、一貫性や話者間の協調などに寄与し、スムーズな談話の流れやコミュニケーション効果を生み出すプロセスを探求した。具体的には、ダイアグラフを用いて発話間のマッピング関係を明らかにすることにより、以下の点を焦点にしてデータ分析を進めた。

（1）言語形式や構造の emergence と文法化
（2）繰り返しに伴う語用論的意味の変化
（3）話者のスキーマ化と拡張の能力
（4）プライミング効果
（5）響鳴の選択的性質と動機

この結果、語彙項目や文法構造だけでなく発話内容や談話の流れ自体までもが発話間の響鳴に大きく影響を受けており、この響鳴の基盤となっているのは、抽象化、スキーマ化、拡張、など、参与者間で共有された認知のプロセスであることが明らかになってきた。

第三に、談話と文法の連関について、対話における文法の構築メカニズムとその認知的背景、すなわち文法化の普遍的プロセスを通して自然な談話に繰り返し生じるパターンが結晶化されるメカニズムを対話統語論と認知言語学の両視点から分析した。具体的には、以下の各項目を焦点にしてデータ分析を行い、響鳴による発話産出のメカニズムを探求した。

（1）スキーマに基づく構文上の響鳴
（2）テキスト・語用論上の響鳴
（3）語彙表現の創発につながる響鳴

これに基づいて、以下の２点に関して考察を加えた。

（1）対話における響鳴の意義やプライミングのメカニズム
（2）対話に依拠する言語獲得のプロセス

最後に、対話統語論と認知言語学の統合的知見として、響鳴とプライミングをキーワードとする前者のアプローチとプロトタイプやスキーマをキーワードとする後者のアプローチとの接点を整理し、認知と対話とコミュニケーションとの関係についてまとめた。

認知言語学は経験科学としての言語学の新たな方向性を探求するパラダイムとして進展してきており、一方で談話理論はフィールドワークに基づき日常言語データを分析することに重きをおいている。本研究では、この両視点を統合して実際の生きた言語運用における伝達行為を問い直しそこに関わる言語現象の分析を試みることにより、認知語用論の新たな可能性を探ると同時に従来の形式主義を中心とする伝達話法研究に新しいアプローチを提起した。

本研究では主に伝達に関わる談話を中心に分析を進めたが、本研究で提起した認知と談話を統合する新しい認知語用論の枠組みは、今後あらゆるジャンルを含んだ言語現象の分析へとスコープを広げることが可能であり、社会的相互行為に根ざした人間の多様な言語行動を可能にする認知と言語運用のメカニズムの解明へとさらに前進することが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 﨑田智子　「伝達の like」　英語青年 pp.107-109,117　2007年　査読無
② Sakita, Tomoko I.　“Parallelism in conversation: Resonance, schematization, and extension from the perspective of dialogic syntax and cognitive linguistics.”　Pragmatics & Cognition 14:3　pp.467-500　2006年　査読有
③ 﨑田智子　「伝達動詞 go の意味拡張：メタファーとメトニミーの視点から」　認知言語学論考 Vol.5　pp.145-177　2006年　査読無

〔学会発表〕（計３件）
① Sakita, Tomoko I.　“Dialogic Resonance, Schematization, and Extension: In View of Discourse and Cognition.”　IPrA 国際語用論学会第11回大会　2009年7月8-13日　Australia
② Sakita, Tomoko I.　“Information Management and Preferred Argument Structure in Conversational Reporting Discourse.”　AILA 国際応用言語学会第14回世界大会　2005年7月24-29日　University of Wisconsin-Madison, USA
③ Sakita, Tomoko I.　“Discourse Basis of Grammatical Patterns: Preferred Argument Structure in Narrative.”

IPrA 国際語用論学会第９回大会　2005 年 7 月 16-21 日　Riva del Garda, Italy

〔図書〕（計２件）

① 﨑田智子、岡本雅史　研究社　言語運用のダイナミズム：認知語用論のアプローチ　2009 年（予定）

② Sakita, Tomoko I.　ひつじ書房　言葉と認知のメカニズム　pp.621-633　2008 年

６．研究組織

(1)研究代表者

﨑田　智子(SAKITA TOMOKO I.)

同志社大学・言語文化教育研究センター・准教授

研究者番号：１０３２９９５６

(2)研究分担者

(3)連携研究者